

すぎたり、逆に入りきらずにこぼれてしまう。スプーンの幅は口の幅より小さいものを選ぶ。またスプーンを嚙んでしまう場合は、ゴム製の材質を選択する（図6-9）。

スプーンを持つ力が弱く、手の機能が十分に発達していない子どもには、軽くて柄の部分が太いスプーンを選ぶ（図6-10）。

皿：深さがあり内側に傾斜しているとすくいやすい。また皿の下にすべり止めシートを使うと食器が安定するので食べやすくなる（図6-11）。

● 介助方法

えん下（飲み込み）機能を引き出すには、口腔に入れる1回の量を考慮する必要がある。多すぎるとむせ、少なすぎると喉への送り込みの動きを引き出せない。子どもの適量を決め、口腔の前方に入れる。口が閉じなかったり、口の開け方をコントロールできない場合は介助者が手で下顎を支える。捕食機能を引き出すには食物を舌の中央に乗せ、上唇がおりて唇が閉じるのを待ってスプーンを水平に引く。また咀嚼（噛む）機能を引き出すには、安全に注意しながら奥歯の上に固形食物を置いて噛む練習をする。

● 水分摂取

水分摂取は、前期食段階は哺乳びん、初期食段階はスプーン、中期食段階からはコップを使う。水分摂取に使うスプーンは、れんげのようにスプーンを横にしたときに子どもの口の幅より大きく、深いもののほうが飲みやすい。コップは口径が大きいと口の端からこぼれやすく、ペットボトルのように小さいと飲むのがむずかしくなる。また鼻に当たる部分がカットされていると、首をうしろにのけぞらなくて飲むことができるので、摂取しやすい（図6-12）。コップで水分を摂取する場合の介助は、やや前傾にし、下唇にコップの縁をしっかりと当てて下あごを安定させ、上唇が水分に触れるようにコップを傾ける。

● 注意しなければならないこと（表6-14）

えん下機能に障害がある場合、食物が気管に入り肺炎（誤えん性肺炎）や窒息を起こす危険がある。次の兆候がみられる場合には、専門機関のアドバイスが必要である。

- ・ 食事の時間が長いのに食べる量が少ない。
- ・ 食事の時間になると機嫌が悪くなる。
- ・ 食事のあと、唾液や痰が多くなる。
- ・ すぐに熱を出すなど、体調をくずすことが多い。
- ・ 約3～6か月間、身長や体重が増加しない、あるいは減少する。

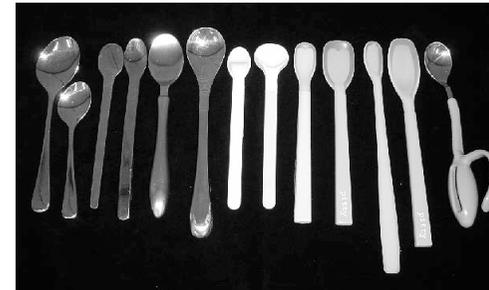
d 食に関する問題行動（偏食、異食、過食）のある子どもへの対応

食に関する問題行動のある子どもは、疾患による身体症状、表現能力の不十分さ、養育の手違いなど、いくつかの要因が重なっている場合が多い。とくに養育の手違いがある場合は家庭だけで対応するのはむずかしい。

● 偏食

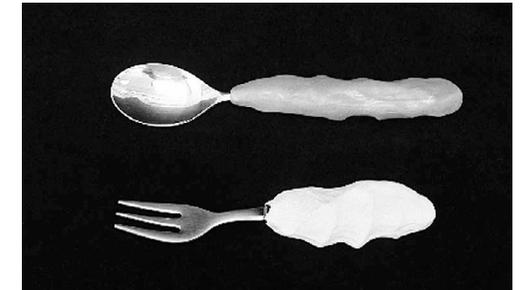
偏食は感覚過敏の1つで、自閉症スペクトラムの子どもに多くみられる特徴である。そして「苦手な食物が出てくる → 嫌がり興奮する → 親はどうしていいかわからず苦手な食物をあきらめ、好きな食物のみ与える → 子どもは好きな物だけを食べる」を何度も繰

図6-9 食べやすいように改良されたスプーン類



全体的にすくう部分が平らになっている。角度がついて口に入りやすくしたもの（左きき用）や、柄の中が空洞で軽量化したもの、持つところが工夫されているもの、口の中に入りすぎないようにしているものなどがある。

図6-10 柄を太くしたスプーンとフォーク



お湯で変形する合成樹脂を柄につけて、太くしたもの

図6-11 皿とすべり止め用のシート

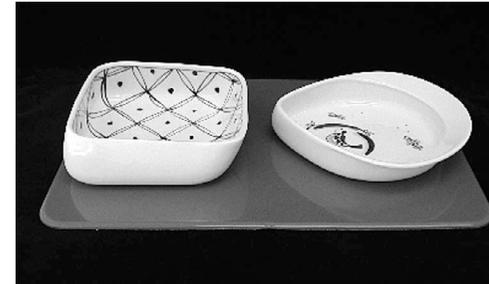
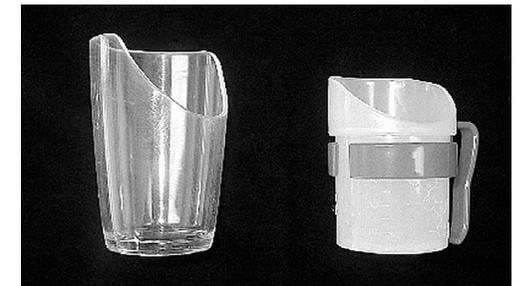


図6-12 鼻にあたる部分をカットしてあるコップ



右は市販されているもの

表6-14 食べる機能に障害のある子どもへの対応例

【事例】4歳男児。脳性麻痺。首がすわっていない。捕食時に口が開きすぎ、上唇が下がってこない。
【対応】床面と体幹の角度は45度の姿勢とし、首はやや前屈みの姿勢とした。食具はすくう部分の浅いスプーンとし、食事形態は初期食から開始した。本例の場合、上唇が閉じないことから後方から下顎と上唇を介助しながら上下唇の動きを教えた。なかなか改善がみられなかったが、8か月後には上唇で食物を捕ろうとする動きがみられ、1年3か月後には固形食を捕食できるようになった。

り返し、ある特定の物しか食べられなくなるという例が多くみられる。対応としては、“嫌いな食物を一口食べたら好きな食物をすすめる”、“好きな物をおかわりするときに嫌いな食物をすすめる”といった取り組みを根気強くつづけることで食べられるようになる場合が多い。過敏による不快感は簡単に治まるものではないが、保育士との安心できる関係のなかで少しずつ改善していく例は多い。また過敏は年齢が上がるとう軽減していくので、あせらずに対応していくとよい（表6-15）。

● 異食

食物以外の物を食べることを異食という。異食には大きく2つのタイプがあるので、分けて対応する。